

文学

隔月刊 第13巻・第4号 二〇一二年 七月八月

岩波書店

《特集》翻訳の創造力

- 翻訳文学とジャンル生成・試論……井上 健 2
——谷崎潤一郎と佐藤春夫の翻訳と散文詩の試みをめぐって——
- ランボーの詩の翻訳について……湯浅博雄 28
- 明治翻訳界のフロンティア……堀 啓子 40
——黒岩涙香の余裕訳——
- 文化史としての翻訳学……J. アングルス 56
——川島忠之助の『新説 八十日間世界一周』の事例——
- 明治期文藝の翻訳……加藤百合 67
- タスカー考……沼野充義 81
——「ふさぎの虫」から「せつない」へ——
- 逐語訳の技法……三枝大修 97
——中村真一郎訳『暁の女王と精霊の王の物語』をめぐるいくつかの疑問から発して——
- 境界線の探究——カフカの編集と翻訳をめぐる……明星聖子 112
- 日本文学のなかのナボコフ……秋草俊一郎 127
——誤解と誤訳の伝統——
- 話芸の翻訳……M. マストランジェロ 144
——読まれるテキストと演じられるテキスト——
- 野上豊一郎の「創作」的翻訳論をめぐる……鈴木貞美 150
——翻訳の文化史へ——
- 【文学のひろば】初めての翻訳……中島京子 170
- 【文学のひろば】逃げてゆくマルテ……松永美穂 172
- 「世界文学」の新しいパラダイムの展開と展望……W. デーネーケ 174
——ラテン文学と古代日本文学を例として「世界古典比較文学」論へ——

せりか書房

浅見克彦著
響きあう異界——始源の混沌・神の深淵・声の秘義
人間は常に異界を背負って生きてきた——リユング、補陀落、神人合の混沌、そして「空の境界」「虚殺器官」川上未映子の異界。古の神話から現代の表象文化まで幅広く渉猟し、異界の深淵へと降りたつ読み手の冒険。
¥2940(税込)

江中直紀著
ヌーヴォー・ロマンと日本文学
現代日本文学最良の刺戟を八〇年代の日本文学に導入した若手批評家・翻訳者として注目を集めた、江中直紀。昨年急逝したその遺稿を、芳川泰久・渡部直己・桂秀実・重松清の友人四人が編んだ、最初で最後の評論集。
¥2625(税込)

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町1-3-11 大津ビル1F
Tel: 03-3291-4676 http://www.serica.co.jp/

汲古書院

冥報記全釋 限定200部
「日本書紀」・「今昔物語集」に大きな影響を与えた説話集「冥報記」の現代語訳
伊野弘子 訳注 ▼A5判/338頁/8400円

中世の金言成句集三書集成——最善本による影印・校訂本と索引
本邦 類書 **玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究**
軍記・説話文学ほか、中世文学研究全般にわたる資料集
山内洋一郎 編著 ▼A5判/624頁/23100円

漢魏六朝における『山海経』の受容とその展開
中国古来の神話的地理誌『山海経』の世界観・宇宙観を考察
松浦史子 著 ▼A5判/356頁/8925円

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4
TEL03-3265-9764 FAX03-3222-1845

塙書房

(価格は税込)

日本中世の母性と穢れ観

加藤美恵子 著 塙選書112 定価2,520円
日本中世における母性のあり方と変遷を、女性への穢れ観を視野にいれて、女性と惣村・信仰・身体性との関係から問いなおし、新たな母性の歴史認識を示すことを提言する。
●目次より……序論 ①中世村落と母性 ②中世の女性と信仰 ③中世の女性と血盆経信仰 ④中世の出産 ⑤中世の授乳—乳母と御乳人

日本古代の税制と社会

今津勝紀 著 A5判 定価8,925円
日本古代の国家と社会を結節する租税現象に注目し、税制の検討をとおして、国家の構造を明らかにするとともに、古代国家を支える社会組織のあり方を具体的に復原する。

女性と穢れの歴史

成清弘和 著 塙選書98 定価2,415円

日本中世女性史論 オンデマンド版

田端泰子 著 A5判 定価5,040円

〒113-0033 東京都文京区本郷6-8-16
TEL 03-3812-5821 FAX 03-3811-0617
http://www.hanawashobo.co.jp

和泉式部集全釈

正集篇・続集篇

A5判・上製・函入
正集篇 一九九五〇円
続集篇 一一五五〇円

佐伯梅友・村上治・小松登美著 榎原本を底本に、正・続集の全首を注釈。正集は、東玉書房版(昭34)の注釈に、以降の研究成果を反映して小松氏が全面加筆改稿。続集篇は小松氏(昭52)を新装復刊。『和泉式部集』を解説する奇蹟の全注釈、遂に刊行。呈バンフレット

冒険淫風怪異 東アジア古典小説の世界
染谷智幸 A5判 二九四〇円 東アジアの人々の交流に、古典小説が果たした役割とは。16-17世紀のアジア文学を総体的に捉え直す。

江戸文化再考 これからの近代を創るために
中野三敏 四六判 一七八五円 従来の近代主義的な評価にとらわれず江戸を再考。歪む近代が成熟するためのヒントは江戸にある。

笠間書院

東京都千代田区猿樂町2-2-3
TEL 03(3295)1331 (価格税込)
http://kasamashoin.jp/

「世界文学」の新しいパラダイムの展開と展望

——ラテン文学と古代日本文学を例として「世界古典比較文学」論へ——

I 「世界文学」——歴史と将来

「世界文学」という概念は歴史的に二百年ほど遡れるが、昨今のアメリカの学問及び教育現場における世界文学のブームはそれとは別の新しいものである。周知のように「世界文学」ということはドイツの詩人であるヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテが定着させたドイツ語、ヴェルトリテラトゥア(Weltliteratur)という概念から生まれたものである。ゲーテは各国の文学を翻訳し、お互いに読み合えば、将来全地球でコスモポリタン文明を作り出すツールになり得ると想像していた。一八二七年、ヨハン・ペーター・エッカーマンは著書『ゲーテとの対話』(Gespräche mit Goethe)にこう記した。「国民文学」というのは、今あまり意味をもたない。世界文学の時代がやってきている。その時代の到来を促進させる

ために、今誰もが力を尽くさなければならない。」⁽¹⁾ ヴェルトリテラトゥアということばは、ゲーテよりも前の一七七三年にアウグスト・ルートヴィヒ・フォン・シュレーツァーという啓蒙時代のドイツの学者によってすでに使用されているが⁽²⁾、この概念に影響を与え、新しいパラダイムを創り出したのは、間違いなくゲーテであった。一八四八年に出版された『共産党宣言』においてもカール・マルクスが「民族的な一面性や特殊性はいよいよ保持しがたいものとなり、数多の、民族のおよび地方的文学から、一つの世界文学が形成される。」⁽³⁾と説き、将来の世界文学の時代の到来を嬉々として歓迎している。

一九世紀以来「世界文学」の定義や理論、意義についての議論は世界各国で多種多様に行われてきた⁽⁴⁾。その結果、二一世紀初めの今、アメリカで独特なパラダイムとして具体

化されるに至った。これは「世界文学」の議論が新興段階にまで発達したと見てよい。

「世界文学」という言葉と概念は現在、世界中で用いられているが、北米では現在少なくとも三つのレベルで展開している。これは他の国ではあまり例がなく、「世界文学」はアメリカの学問及び教育界でにわかにかつ予想外に大きな役割を担い始めたといえる。

アメリカにおける三つのレベルとはつまり、概念としての広範かつ理論的な議論、比較文学分野における新潮流としてのパラダイム、さらに大学の教育現場における一般教養科目としての取り上げられ方、だ。概念に関する議論はドイツでも盛んに行われ、それは通史の出版に加えて、最近では十九冊に及ぶ『世界文学事典』(Kindlers Literaturlexikon)⁽⁵⁾の刊行などの学術的達成にも明らかなのではあるが、大学設置の科目としてはアメリカと違って原則的に存在していない。ピッツァー氏が強調するように、大衆教育システムにおいて世界文学が顕著な役割を担っているのはアメリカ的現象であり、二〇世紀前半まで遡る伝統でもある。そしてまた現在のアメリカはおそらく他国に例を見ない、一般教育カリキュラムにおける世界文学教育を普及させている国だということができ(6)る。

大学に設置された科目としての世界文学の発展を振り返ってみれば、最初に「世界文学」という講義を始めたのは、ウィスコンシン大学のフィロ・ブック教授であった⁽⁷⁾。この

講義開始とともに彼が一九三四年に講義用の最初の世界文学アンソロジーを出版したのだが、このアンソロジーの九〇％はヨーロッパ文学から、それ以外はヨーロッパ文学に影響を与えたインド・ペルシャ・アラビアの文学などから編まれている。また、二〇世紀前半の世界文学教育観の基礎を作った学者の一人として挙げられるのは、シカゴ大学のリチャード・G・モールトン教授である。一九一一年に出版された *World Literature and Its Place in General Culture* の中で、教授は世界文学を「専門化と視野狭窄が併行して起きる恐れのある自国文学に対峙するものとして定義し、大学の基礎コースに世界各国の文学を英語訳で読むというクラスを設置、これを大衆教育のベースに置いた。その一方で世界文学は学部を問わず大学生一般の思想・道徳観念・想像力を養う有効なツールである」というヴィジョンを提示したのである。このコースは「Great Books Courses」と呼ばれ、西洋古典文学を中心として全新生入向けの必修科目に組み入れられるようになった。この伝統は現在もシカゴ大学やコロンビア大学などにおいて踏襲されている。

このように、一九九〇年代以前のアメリカにおける大半の大学の教育現場で世界文学という科目は、ヨーロッパの基礎的な大作を中心とし、一方で世界のそのほかの文化の文学を欧米文化と共鳴させることで、その文化の普遍性を表明するアプローチを取った。しかし一九九〇年代にその世界文学のヴィジョンが大きく変貌してきた。アメリカ社会の多民族性

がますます顕著になってきた現実にあわせ、また、文学理論において展開されるポスト・コロニアル主義、女性学、ジェンダー学等の影響を受けて、逆に各国の文化的な独自性、社会における民族的な豊かさ、文化的な差異が価値あるものとして評価されるに至った。そして言うまでも無く、その大きな社会及び学問上の変化が世界文学という科目にも及んだ。このことは、この十数年の間に三つの幅広い「世界文学アンソロジー」が発行されたことから明らかである。『ノートン世界文学アンソロジー』(Norton Anthology of World Literature)、『ロングマン世界文学アンソロジー』(Longman Anthology of World Literature)、『ベッドフォード世界文学アンソロジー』(Bedford Anthology of World Literature)の三つである(ノートン・ロングマン・ベッドフォードは出版社名)。各々六冊、全冊で六五〇〇頁以上で、第一冊の古代エジプト・メソポタミア・インド・古代中国・ギリシア等に始まり、第六冊の二〇・二一世紀の全地球の作者の簡単な解題まで、文化的な豊富な参考資料とともに、世界文学の大作を学生たちに原文で手軽に読ませる仕立てになっている(さらにウェブ上でも十分な増補資料が提供されている)。目下北米の一二〇〇の大学でこの三つのアンソロジーをテキストにした世界文学の授業が行われており、故に毎年約一〇万人から一二万人の学生たちが世界文学の授業に参加していることになる(テキストの使用率は、ノートンのアンソロジーが約七〇%、ロングマンとベッドフォードアンソ

ロジーが各々一五%ずつの割合)⁽⁸⁾。世界文学の授業が必修、もしくは他の基礎的な必修の文化コースの一つとなっているため、世界文学の授業を履修する学生の大半は実は文学部の学生ではなく、経済学や政治学、物理学等の学生である。現在のアメリカの大学における世界文学履修者のこの多さは、これからのアメリカ社会全般において必ずやなんらかの変化をもたらすに違いないと思われる。

アメリカの大学におけるリベラル・アーツ教育の伝統に即して展開される近頃の世界文学ブームに応じて、世界文学教育の入門書も出されている。例えば教員のためにデイヴィッド・ダムロッシュ氏によって編集された *Teaching World Literature* (New York: Modern Language Association of America, 2009) は、世界文学論を要約した上で、世界文学のカリキュラムをどのように作ればよいか、シラバスをどのように組み立てればよいかについて様々な豊かな資料を提供し論じたものである。学生向けには、ダムロッシュ氏の *How to Read World Literature* (Chichester, UK: Malden, MA: Wiley-Blackwell, 2009) という入門書が、世界文学の魅力がどこに存在し、どのように見出すことができるかという問いを刺激的に投げかけている。

今日、大規模な世界文学アンソロジーを編集することは、大変な挑戦である。筆者も今年新版の『ノートン世界文学アンソロジー』の東アジア担当編集者として何年にもわたって様々な問題に直面しなければならなかった。中国・日本・韓

国・ベトナム文学の膨大な流れからどの作品を収めるか、どのような基準をもって選択すればよいかというような問題である。収容作品の分量は総計僅か数百頁分しか許されない。しかも最も代表的で文化的かつ文学的な価値を持ち、さらにはアメリカの大学生が面白いと感じる作品でなければならぬ。その選択はある意味、量的な制約だった。「世界文学」と言うからには世界各国の、しかも全時代の作品が対象である。たとえ六冊で六五〇〇頁以上あるとはいえ、「世界文学」を代表させるにはこれは余りにも頼りない頁数だった。

言うまでも無く、世界文学の資料の総量に注目すると、世界文学の全てを読む・知る・研究することは到底不可能な、超人的なタスクになってしまふ。故に世界文学の理論者は最近、ゲーテが唱えた本来のヴィジョンを顧みて、「世界文学」というのは世界の文学作品の量よりも、文化・言語を超えてコスモポリタンのコンテクストの中で文学を読む一つの方法を示す現象として把握することを提案している。例えば、世界文学に関して現在最も傑出した理論者であり、比較文学者であるハーバード大学のデイヴィッド・ダムロッシュ氏とスタンフォード大学のフランコ・モレッティ氏も(彼らの世界文学論の立場はかなり違っているが)やはり「質的な定義」を強調する。ダムロッシュ氏は以下のように説いている。

世界文学は、いったんいくつかの外国の作品が我々の心の中で共鳴しはじめたら、十分に展開しているといえる。これは比較文学者に潜むパニクに対してさらなる解決を提供する。つまり、世界文学とは、なんとかして途方もない営みと知りながら読破しなければならない作品素材の巨大な集合体ではなく、それは、たくさんの作品を広範囲にわたって読むことで探求できるのと同じくらい効果的な、僅かな数の作品を集中的に読むことで経験できる読書の手法なのである。⁽⁹⁾

モレッティ氏も同じく「世界文学」というのは、資料よりも方法であるということを以下のように説明している。

世界文学は一つの物ではなく、問題である。それも、新しい批判的な手法を要求する問題である。そして、その手法は、より多くのテキストを読むことだけでは見つけられるものではない。そのようなやり方では理論は生まれない、理論を生み出すには、飛躍、賭け金——つまりは仮説——が必要なのである。⁽¹⁰⁾

世界文学の概念が一九世紀以降のグローバル化の過程の産物であるため、いきおい現在の世界文学論は圧倒的に現代文学を中心としたものである。しかしながら、世界文学教育は世界各国の古典文学を厚く取り上げている。例えば既出の三編の「世界文学アンソロジー」の六冊のうち、第四冊までは古代・中世・近世文学を扱い、第五・六冊のみが一九世紀から二一世紀にかけての文学を扱っている。

本稿の主目的は、世界文学論が傾倒する現代文学との釣り合いが取れるように、世界の主な文化の古代と中世に焦点を当てた、「世界古典比較文学」といえるような世界文学論を

立ち上げることである。つまり、東アジア、インド、中東、ヨーロッパ等の近代以前の古典文学を並べて対照することで、各国の文学伝統の特徴をより明瞭に際立たせることができる方法を打ち出すということである。

II a 「世界古典比較文学」論の例

——中・日文学とギリシア・ラテン文学の対比

筆者が提案したい、そしてまた将来的な展開を望みたい「世界古典比較文学論」の例として、現在準備中のブックプロジェクトを紹介したい。アメリカの大学で文学を教えているドイツ人である筆者は、目下の北米における新奇な「世界文学」パラダイムの刺激を受け、「古典世界の比較文学——中・日とギリシア・ローマの関係をひも解く」という幅広い研究プロジェクトを行っている。最も広い意味でいうならば、この、現在刊行を待っている拙著は「相対年齢のドラマ」(“drama of relative age”)と名付けられる現象を検討するものであり、ある文化の間の年齢差を条件に、二つの文化の間の受容と競争のダイナミズムを文学の世界の中で考察するものである(1)。

もう少し噛み砕くと、ある若い文化が相対的に古い文化の先例を受容しながら、自分自身の文化圏を作り出す過程を検討するものである。年齢差というのは、人生における有力な要素でもある。個人のレベルでいえば、世代関係(両親・子供)や世代の内の関係(兄弟・姉妹)は、社会における習慣・価値観・教育制度等を深く形成する現象である。その年齢差を文

化間におこるダイナミズムに適用するならば、最も複雑な事象である、優越感と劣等感、モデルと模倣、自己と他者のアイデンティティの間に動く過程を指しているであろう。周知のように古代日本と古代ローマの文人にとって、中国とギリシアは、先行する文化の役割を果たした。そして、後発文化の文人にとっては中国とギリシアで展開した文学伝統の文体や概念、言葉遣い、語彙の洗練、詩論、文論等が文化的な参照文化(reference culture)と呼べるモデルとして機能した。

筆者のプロジェクトの主な課題は、一つはこうした後発文学伝統の文人たちが、先行する文化の先例を、異なる言語を用いて、新たに政治的・文化的文脈に置き直すという挑戦にどのように取り組んだのかということである。もう一つは、古代日本とローマの文人が中国とギリシアの文学伝統の先例にある時は従い、ある時は反発しながら作り出した自分自身の文学伝統の創造過程を比較するとき、どんな相違点が見られるか、そしてその相違点がどんな意味を持つかということである。

この巨大な課題について実例を取り上げて示す前に、まず古代日本とローマ文学の比較を正当化しておく必要がある。一体なぜこの二つの、東アジアと地中海の文化圏において、お互いに歴史的な関係を持つことなく形成された文学伝統を比較できるのであろうか。おそらく読者諸氏も「なるほど、まるで比較にならない、比較するべきものではない」という考えが湧いてきているかもしれない。その多種多様な古代日

本とローマの豊かな文学伝統の間の少なくない相違点は、有意義な比較の試みを不可能にするのではないか。そこで、まず、古代日本とラテン文学伝統の共通点を示しつつ、両者の比較にどのような意味があるかということ明らかにしたい。

古代日本とローマ文学、両文学伝統の比較を正当化する共通点としては、少なくとも以下の三つがある。

第一共通点——後発文学であること

一つは、両者が後発文学伝統であるという共通点。日本の場合、作品の作者である文人は、中国の四部の「経書」と「子書」を除き、自分たちの「史書」と「集書」を執筆し、中国の漢詩文のジャンルを受け継ぎながら、日本漢詩文の伝統を作り出した。勿論それらジャンルの内容と役割はかなり違っていた。例えば、司馬遷の『史記』にある「本紀」「年表」「書」「列伝」等、正史の形を取る歴史書は、日本には受け継がれなかった。また、同じく中国で非常に重んじられている、漢代以来の「賦」の文体は、日本ではそれほど重要な役割を果たさなかった。それにもかかわらず、日本における漢詩文の伝統は、中国の文学伝統の流れから「後発文学」として誕生してきた。ローマの場合は、日本での「経書」や「子書」の不在と同じく、ギリシア哲学に相当する、独立した「ローマ哲学」というものがなかったことをローマ人は頻繁に嘆いた。しかしローマの文人も確かにギリシア文学の主な文体、概念、文論等を吸収しながら、自分自身の後発文学

伝統を生み出した。ローマ帝国における、オラトル(ラテン語 orator)と弁論術(rhetoric)の最も有名な教師として活躍したクインティリアヌス(Quintilianus, 三五一〇〇年頃)は、「風刺(satire)」と「愛情エレジー(love elegy)」という文体が真にローマ人が創り出した文体であることをプライドを持って強調した(2)。しかしこのことは逆に、ラテン文学のギリシア文学に対する独自性を強調するよりも、この二つの文体以外のラテン文学の文体のほとんどが、ギリシア文学から輸入したものであることを皮肉にも明らかにしたのである。

日本と比べて、ラテン文学はより強い意味で「後発・後生文学」であったと言わざるを得ない。日本では、和文学である「和歌」「かな日記」「物語」等があり、それらは言うまでもなく日本人が中国の文学伝統から独立して、自ら創出した文体による産物である。周知のとおり明治時代に定着した国文学のカノンの立場から見ると、今日、古代文学の大作とされる文学作品は——『万葉集』『源氏物語』『枕草子』等——中国文学の文体とは違う独自性のある和文体に属するものである。このように文体的な独自性の相違点はあるものの、日本とローマ文学が後発文学であることの共通点は認められなければならない。

第二共通点——洗練された先行文学からの

出発であること

二つ目の共通点は、古代日本とローマの文学伝統は非常に

洗練された先行する文学を背景にして出発したという事実である。例えば七五一年に編集された日本に現存する最古の漢詩集である『懷風藻』の詩人は、『詩経』四言詩の純朴な作風よりも華美な六朝と初唐の五・七言詩の作風を身につけ、日本の漢詩伝統の出発点とした。よく考えてみれば、『詩経』と『懷風藻』がそれぞれ編集された年のギャップ、約一四〇〇年の間に、中国漢詩史上革新的な変化が起こっている。例えば屈原の「離騷」や、漢代末の「建安七子」等によ来し、名前を持った作者としての「詩人」の概念、六朝時代の五・七言詩の発達、沈約の梁朝以来の四声(平・上・去・入・八病)の説のもとで作られた律詩という詩形の発展、そして最後に『詩経』における「比」や「興」といった非常に単純な修辭の使用から、対句に依拠した律詩における洗練された修辭的比喩へと移行した詩風の登場。日本人は最初に漢詩を作ることになった時、一四〇〇年間に及ぶ中国の文学伝統の変遷を飛び超えて、非常に風雅に満ちた出発点から国風の漢詩伝統を築き始めたに違いない。

ローマの場合、先行するギリシアの文学との時差が、日本と中国間のその三分の一にとどまる。ギリシアの文学伝統の基礎となる、紀元前八世紀ごろにホメーロスによって詠まれた『イーリアス』と『オデュッセイア』の叙事詩(epic)は、紀元前三世紀ごろの最初のローマの詩人との間の時差は、五〇〇年に過ぎない。この五〇〇年という、ラテン文学伝統が創始されるまでの間、ギリシアでは、紀元前八世紀から六世

紀にかけての初期時代のアルカイック文学(archaic literature)を経て、前五・四世紀に古典期の時代(classical literature)に入り、前四世紀末からは後古典期の(postclassical)の、非常に文飾が濃く、洗練されたドラマチックなヘレニズム期の文学(Hellenistic literature)へと変遷してきた。このように見ると、ラテン文学は日本と中国のケースと比べて、ギリシアにおけるヘレニズム期文学とほぼ同時に展開してきたことになる。その同時性の象徴的な例を挙げれば、最初の「ローマ詩人」とヘレニズム期の最も有名なギリシアの詩人の人生はオーバーラップする。具体的には、リービウス・アンドロニクス(Livius Andronicus)という詩人が紀元前二四〇年に行われた「ローマ祭」(Ludi Romanus)と言われる大きな民衆祭りの際にギリシア演劇をラテン語に翻訳したが、ラテン文学の誕生の日と言われ、同年に、ヘレニズム期のカリマコス(Callimachus)という優れた詩人が亡くなっている。いずれにしても、時差の期間は違っても、日本とローマ文学は洗練された中国とギリシアの先行する文学から出発したという共通点は明白である。

第三共通点——定着した教育カノンからの 出発であること

三つ目の古代日本とローマ文学の共通点は、中国とギリシア世界に定着していた教育制度から文学伝統が定着したことである。中国では漢代になると、漢の武帝のもと、大学が創

立され、五経の博士制度のおかげで、学問文化、つまり伝授、注釈、編集等の活動が出現した。日本では、七世紀末・八世紀初めぐらいに創設された大学寮が中国漢代以来栄えてきた教育制度の先例を適用し、明経道、紀伝道、明法道、算道の学科の制度を整備した。日本の教育制度は、中国文学のカノン(基本的なテキストの原文と注釈、実用書、類書等)に基づいて作られたわけである。日本文学の開始がいかに中国の古典カノンと密接に結びついていたかということは、『懷風藻』

の序に天智天皇のイメージが反映されていることからわかる。天智天皇が、「調風化俗、莫尚於文(風を調へ俗を化むることは文より尚きことは莫し)」ということをよく理解していたために、「爰則建庠序、徴茂才、旋招文之士、時開置醴之遊(ここにすなわち庠序を建て、茂才を徴し、文学の士を招き、時に置醴の遊びを開きたまふ)」ということになった¹³⁾。中国式の教育制度と学問を取り込んだことこそが、飛鳥と奈良時代の日本の官人達に漢詩文を作ることの可能性にしたわけである。ローマの場合、ヘレニズム期のエジプト・アレクサンドリアの優れた学者が確立させたアルカイック及び古典ギリシア文学に対する注釈・版本・カノンを取り込み、教育制度を整えた。日本と同じように、ラテン文学の開始はヘレニズム期に出来上がったギリシア古典カノンおよび学問と密接に繋がっていた。

ローマ文学の創立者として賞賛されているリービウス・アンドロニクスが、ヘレニズム期のカノンでも確かに最高位に置かれる文体と作品——ホメーロスの『オデュッセイア』とギリ

シア悲劇——をラテン語に訳したことは、このギリシア学問、およびラテン文学と教育間の密接な関係を十分に証明するといえよう。

ここで、古代日本とローマの文学伝統を比較するというプロジェクトを正当化させる共通点とともに、両文学伝統の比較を最も複雑に、かつ興味深くする重要な相違点もあることを喚起しておきたい。古代日本とローマの文学伝統の間の四つの大きな相違点を明らかにするために、前述のリービウス・アンドロニクスのケースを考えてみたいと思う。

そのリービウス・アンドロニクスは、紀元前八世紀からギリシアの商人によって植民地化されたイタリアの南部、いわゆる「マグナ・グラエキア」(Magna Graecia、ラテン語の「大ギリシア」に相当する)に生まれたギリシア人だった。当時領土を着々と広げていたローマ共和国はリービウス・アンドロニクスの故郷であるタレントウムという都市を征服し、リービウス・アンドロニクスは、二七二年ごろ捕虜としてローマへ連れてこられたといわれる。バイリンガル(ギリシア語とラテン語)のギリシア人であったことから、ローマの「リビア」という貴族の奴隷の身分でギリシア語とラテン語の教師(grammaticus)として活躍した。解放され「自由民」となった後は、パトロンの「リビア」氏をラテン語にして「リービウス」と名乗った。ローマ国家にとって重要なローマ祭り(二八〇頁でも既出)でギリシア悲劇の翻訳を頼まれたり、自身も劇作家兼俳優であったことからローマの最初期の作者たち

と俳優協会を創設したりした。彼の著作の大半は失われており、ラテン語に訳した『オデュッセイア』、またラテン語での十作の悲劇と三作の喜劇からの、数句から成る短い断章六〇余りしか残っていない。キケロ(紀元前一〇六―四三年)の共和国末期の時代になると、リービウス・アンドロニクスはラテン文学の創始者であっても、その著作は原始的な作風を有し、ラテン文学誕生期の恥ずかしい残物として、葬られてしまった。ラテン文学草創期の最初の約二世紀の間に、創始者の偉大な貢献が無に帰したあと、古代ローマ末期約二世紀から五世紀にかけてにアルカイックラテン語について関心を持った言語学者によって、リービウス・アンドロニクスの遺句は奇妙で原始的なラテン語の例としてしばしば引用された。これは文学としての価値を認められたからではなく、あくまでもアルカイックラテン語への興味から、その六〇余りの断章がラテン語文法や言語学の作品の中で伝えられたというわけだ。

以下リービウス・アンドロニクスを例として古代日本とローマの文学伝統の相違点を説明していくことにする。

第一相違点——地政学(国家の独立性・国家の合併)

第一の基本的な相違点は、日本とローマの地政学上の違いである。紀元前一四六六年に、共和制ローマの軍隊はギリシア地域の様々な国家を含む「アカイア同盟」を打ち破った。これはヨーロッパの歴史上、非常に運命的な日の一つにあたる

と言っても過言ではないと思う。その結果、それまで若いローマの「参照文化」の機能を果たしてきたギリシアは、思いがけずローマ国家の植民地となってしまった。これにより文化的には優越性を維持してきたギリシアが、政治的には劣等者になってしまい、このときからローマ人の詩人はギリシアの文化的な優越性と政治的な劣等性というパラドクスと向き合うこととなった。

この紀元前一四六六年のローマによるギリシアの征服は、紀元前一世紀の後半から始まったアウグストゥス皇帝下のいわゆるラテン文学の「黄金時代」から約一〇〇年前の出来事であったので、現在で言う「ラテン文学」は、政治的に合併したギリシアに対する文化的な劣等性の雰囲気の中で書かれた文献だということになる。ローマ人はこの政治的な優越性を繰り返し強調するのだが、文化的な優越性はギリシアにあることは認めざるを得なかった。このことはローマ文化および文学に非常に強い痕跡を残した。

一方、日本のケースは全く異なり、一八九五年に大日本帝国は、少なくとも一五〇〇年もの間にわたって参照文化の役割を果たした中国、つまり大清帝国を日清戦争の際に負かした。これは当時の東アジアにおいて想像だにできない事件であった。ローマとギリシアのケースと比べてみれば、黄金時代といわれる平安文学の時代から約一〇〇〇年後に起こった出来事であり、日本古典文学に言うまでもなく全く影響を与えるものではなかった。長い歴史において、島国としての日

本が中国の数多の王朝を征服することもなく、また中国の王朝に征服されることもなく、大陸に対して独自性を維持することができたのは、日本の文人にとって非常に幸いなことであった。ローマの文人のように常に文化的、政治的ヒエラルキの矛盾の間で揺れ動く心理的な状況は最大の試練であったかもしれない。逆に言えば、近世以前の日本は遠くから中国というものを自由に想像し、自分のイメージに適用することができたということである。

この背景には、古代日本列島と大陸との間を移動した人の数が非常に少なかったという事実がある。勿論、優れた遣唐使であった弁正・吉備真備・空海・最澄等があり、逆に鑑真ら日本文化形成に多大な貢献をした渡来僧もいた。しかし、ローマ国家におけるギリシア語とラテン語の人口が言語的かつ文化的に調整された状況と比べると、古代日本と中国の間の人的交流は圧倒的に少なかった。日本とは対照的に、ローマの貴族はリービウス・アンドロニクスのようなギリシア人の教師たちに育てられた。どんなにギリシア人の教育水準が高くても、ギリシア語地域が征服されたことで、ギリシア人は捕虜としてローマに運ばれてきた。ローマの教育制度はギリシア人の奴隷・自由民がその基となった。そして、ローマのエリート教育の不可欠な部分として、ローマの首都での教育が終わると、二、三年間ギリシアあるいは東地中海にある小アジア(Asia Minor、現在のトルコ)での、最も優れた学者および弁論家の学校への留学が待っていた。言うまでもなく、

平安京の大学寮の文章博士たちは中国の奴隷ではなかったし、中国を見学に行った学生僧の人数もギリシアへ留学したローマ人のそれと比べれば、ほとんど無に等しい。ローマ国家の幅広い征服によって起こった様々な言語を操る人口の合流、共存、移動が、古代日本とローマを比較する際の第二相違点にも連結する。

第二相違点——言語(漢字文化圏・翻訳文化圏)

周知のように日本文学は漢字文化圏という文脈で展開してきた。東アジアと比較するとき、ラテン文学のケースに相当する概念を探そうとするならば、古代ヨーロッパの文脈はおそらく「翻訳文化圏」と呼べるだろう。例えば東アジアの漢字文化圏のおかげで、遣唐使として中国へ派遣された日本人は口頭では中国語で通じ合えなくても、漢字と漢文を通して「筆談」でお互い通じ合うことができ、さらには漢詩を書いたり、詩的比喻を使って相手に友情を伝えたりすることができた。それとは対照的に、ヨーロッパの様々なアルファベットの言語を使用する民族は、共通の言語(例えばラテン語を学ばないとお互いに理解し合えず、このような「翻訳文化圏」においては翻訳が不可欠な要素であった。たとえば、ローマ字を用いてラテン語で書かれた文章を、ギリシア文字で一字一字書き出しても、ラテン語が分からないギリシア人にはこの文章は全く分からない。音通りに読むことはできても、その内容は全然理解できないのである。つまり、古代日本文学の

伝統は翻訳を介さなくてもよい「漢字文化圏」という東アジアの国々との連携性に恵まれて展開したが、それとは違い、ラテン文学は翻訳がなければ交流壁が厚い「翻訳文化圏」の文脈で発展したといえる。

このことによって、古代日本とローマは文学および文化のレベルにおいて次のように異なった点を見せることとなった。ローマの文学は、バイリンガル・モノリテラト・バイカノニカル (bilingual, monoliterate, bicanonical) の文学伝統を作り上げたといえてよいだろう。具体的に言い換えれば、通常ローマの文人は、ラテン語とギリシア語を話すことができて（＝バイリンガルの口頭能力）、文学を執筆する言語としては基本的にラテン語を使った（＝モノリテラトの文学伝統）。そしてラテン文学伝統を作り出した教育制度は、二つのカノンをベースにした（ギリシア文学・ラテン文学のバイカノニカル教育制度および文学創作）ということになる。ローマのケースと比較すると、古代日本の文学伝統は、モノリンガル・バイリテラト・トライカノニカル (monolingual, biliterate, tricanonical) であるといえてよい。日本の文人は、口頭で中国語を話すことはできないため、訓読の助けを借りて、モノリンガルの口頭言語能力を駆使したが、テキストは、漢文と和文の二つの書面語で記録した（バイリテラトの文学伝統、すなわち、変体漢文・和漢混交文等を含む、バイリテラトというよりも純粹漢文と純粹和文の様な文体を用いて異なるスタイルで書かれた）。そして、平安中期以降の教育と文学創作は、中国の漢詩文・日本の漢詩文・和文の

三つのカノンに基づいていた（中国の漢詩文と日本の漢詩文の間の区別は曖昧だが、『和漢朗詠集』の場合その三つのカノンの階層性が明確である）。

この口頭能力・書面語・文学カノンを含むローマの2、1、2、そして日本の1、2、3のパターンは、どのような結果をもたらしたのか。ローマ文学と日本文学における異なるリテラシーの図式は、結局ローマと古代日本の文学伝統の間にどのような相違点を生じたのであろうか。この大きな問いへの答えは本稿では書き尽くせないが、この問いについて細かく論じていくと、異なるリテラシーの図式は、ローマの場合、ローマ人の国語（すなわちラテン語）に対する劣等感を生むことに一役買ったのではないかと考えに行き着く。一つだけ実例を取り上げてみる。漢文の場合、中国人と日本人が読んだ原文（日本の場合には白文は全く同じものであった。しかしラテン語の場合はギリシア語の原文を読むとしたら、翻訳の必要があり、（ギリシア語の）原文と（ラテン語の）訳文は二つのテキストに分かれてしまう。さらに、ローマの文人は、ギリシア語の原文に対して時として劣等感を持ち、この感情が強い影響力を与え、ギリシア語に対する「国語の不足（ラテン語で *Patris sermonis egestas*）という概念を形成するのに貢献したのではないかと思う。二世紀の博学のアウルス・ゲッリウス (Aulus Gellius) 一三〇年—一八〇年頃」という文人は、この言語コンプレックスを次のように捉えて述べている。

私はしばしば私たちラテンの詩人のコメディを読むが、

点の結果生じたものではないかと考えられる。詰まるところ、これこそが「漢字文化圏」と「翻訳文化圏」の文脈で展開してきた文学伝統の大きな相違点なのである。

第三相違点——前期古典文学の保存 (日本での現存・ローマでの消失)

ローマ文人が抱いた「不足国語」の劣等感とは、ラテン文学の黄金時代以前（紀元前約三世紀から紀元前一世紀の半ばにかけて）の文学の保存に悲劇的な影響を与えたかもしれない。ラテン文学の最初の約二〇〇年間の作品の大半は失われてしまい、何句かの断章の形でのみ伝えられている（年表A）。その中で目立った例外としては、プラウトゥス (Plautus, 紀元前三四〇年頃—一八四年) とテレンティウス (Terentius, 紀元前一九〇年—一五九年) の喜劇、そして大カトー (Cato, 紀元前三四四年—一四九年) の『農業論』(De agricultura) が挙げられる。なぜプラウトゥスの一三〇篇ぐらいの喜劇のうち、現在まで二一篇が残っているのかというと、これは共和制末期のローマの最も有名な学者であるウァッロ (Varro, 紀元前一六六年—紀元前二七九年) に感謝しなければならない。ウァッロは『プラウトゥスの喜劇について』(De Comediis Plautinis) という自身の喜劇論の中で、その保存されてきた二一篇をローマ喜劇の大作と評価し、ウァッロによる高い評価のおかげで、プラウトゥスの何篇かの喜劇が早くにカノン化され、今日まで残っている。大カトーの『農業論』が今日まで伝えられている理由としては、ロー

それらはギリシアの喜劇作家の言葉を使い、翻訳したものだ。そして実際、それらを読んでも私は少しも嫌な気持ちにならなかったりしない、それらは実に、優雅に、美しく書かれており、それよりよいものは存在しないかのように入る。しかし、もとのギリシア語のテキストをそれらの隣に置いて比べる際に、一句ずつ慎重に細かく並列させて付きあわせ、交互に読むと、ラテン語が突然貧弱に見えてくるのだ。つまり、ラテン語の文章は、ギリシア語の原文がもつ機知ときらめきを欠き、張り合えるものではないということだ。¹⁶

ゲッリウスはラテン語の訳文を初めは非常に上出来だと思うのだが、ギリシア語の原文と対照させたとき、突然ラテン語が不足の国語であると感じ嘆いている。訳文より価値がある原文が存在するがゆえに沸いてくる言語コンプレックスがそこに見て取れる。ここで簡単な思考実験を試みる。このゲッリウスのようなローマ文人の経験を古代日本の文脈に置き換えると、菅原道真が白居易の漢詩を見渡して「ああ、白居易の日本語の翻訳は本当にだめだ。これでは我々の国語（日本語）が不足しているという点が丸見えではないか」と嘆いていることになる。これは本当に想像するだにおかしい。確かに現代以前の日本において、訓読のおかげで『白氏文集』の日本語の翻訳の必要がなかった、それゆえに、上のような道真の嘆きは想像し難い。つまり、ローマの文人の言語コンプレックスは、日本とローマ文学のリテラシー図式間の相違

B 日本文学初期 250 年間略年表 (670 年～)	
全存文献あり	何句かの短章のみ
～670 近江朝『懐風藻』に於ける漢詩)	
712 年『古事記』	
713 年頃『風土記』	
720 年『日本書紀』	
751 年『懐風藻』	
～759 年『万葉集』	
758-822 年頃『日本霊異記』	
772 年『歌経標式』	
797 年『続日本紀』	
810 年頃『文鏡秘府論』	
814 年『凌雲集』	
818 年『文華秀麗集』	
827 年『経国集』	
835 年『性霊集』	
840 年『日本後紀』	
869 年『続日本後紀』	
879 年『都氏文集』	
900 年『菅家文草』	
905 年『古今和歌集』	

文献保存略年表

A ラテン文学初期 250 年間略年表 (紀元前 240 年～)	
全存文献あり	何句かの短章のみ
前期ラテン文学	
	Livius Andronicus (紀元前 280/260-200 頃) : 劇作家, 叙事詩人
	Naevius (紀元前 264-201 年頃) : 劇作家, 叙事詩人
Plautus (紀元前 254-184 年) : 劇作家	
Ennius (紀元前 239-169 年頃) 詩人 (叙事詩等)	
Cato (紀元前 234-149 年) : 『農業論』	
Pacuvius (紀元前 220-130 年頃) : 劇作家	
Fabius Pictor (紀元前 3 世紀) : 歴史家	
Terentius (紀元前 190-159 年頃) : 劇作家	
Accius (紀元前 170-86 年頃) : 劇作家, 批評家	
Lucilius (紀元前 160-103 年頃) : 風刺詩人	
共和制末期とアウグストゥスの帝国	
Varro (紀元前 116-27 年)	
Cicero (紀元前 106-43 年)	
Caesar (紀元前 103-44 年)	
Cornelius Nepos (紀元前 100-24 年) : 列伝作家	
Lucretius (紀元前 99-55 年頃) : 詩人, 哲学者	
Catullus (紀元前 84-54 年) : 詩人	
Vergilius (紀元前 70-19 年) : 叙事詩などの詩人	
Horatius (Horace) (紀元前 65-8 年) : 詩人	
Livius (紀元前 64-紀元 12 年) : 歴史家	
Propertius (紀元前 50-15 年) : 詩人	
Ovidius (紀元前 43-紀元 18 年) : 詩人	

マ国家の領土拡大とともに、奴隷を使った広大な農場の運営に実用的な価値があったという点がよく指摘される。つまり、文学的な業績というよりも、農業の実用書として重視され、広く流布したため、幸いにも生き残ったということであろう。

前期のラテン文学の保存状態を日本文学の最初の二〇〇年間に当てはめてみると、驚くべき結果が出る。試みにもう一度思考実験を試みよう。結果は、日本文学の保存パターンをラテン文学の保存パターンと一致させると、『古今和歌集』時代までの日本のほとんどの文献は、なくなってしまいう年表』。想像してみてもいい。『古事記』の何章か、『懷風藻』と『万葉集』の詩歌の何句か、そして道真の『菅家文草』の何対句か、『古今集』の何首しか伝わっていないという日本文学の風景を想像できるだろうか。唯一、藤原浜成の『歌経標式』の歌論書のみが、実用書として大カトーの『農業論』とは異なり、具体的に和歌を作るには余り役に立たなくても完全な形で残るだけ、という日本文学史を想像できるであろうか。前期ラテン文学の場合はそうなのである。

ラテン文学と日本の前期文学の保存パターンの相違点は以上だが、本面に面白いのは、相違点よりも、むしろ古典文学者が両文学伝統の前期文学の保存状況に対してどう考えたかである。日本の国文学者のほとんどは、『古事記』『万葉集』『古今集』などがほぼ完全な状態で残されてきたという幸運を自然なことと思っている。もちろんそれは、それらが日本文学の傑作であった故だが、それに比べて、ラテン文学の研

究者は、リウィウス・アンドロニクス、エンニウス、ルシウス等は原始的な、未開発の文学と評価されているため、それらがラテン文学前期の下等な作品として失われてしまったこともまた同じく自然な状況だと納得している(ラテン文学者の前期文学に対する強い偏見は、日本の文学研究者の間で共有されている『懷風藻』の漢詩の質に対する蔑視に近いものがあるが、たとえば人麻呂の歌とその後『古今集』との関係のように、日本文学においては前期に属する作品群だからといって後出のものより原始的だとか拙劣だとかいう軽蔑感はあるべきではない)。

古代ヨーロッパと古代日本の文学伝統を、幅広い比較古典文学の枠組みに当てはめ捉えなおす時にこそ、「前期文学は原始的であるが故に保存されてこなかった」という文学史的な思い込みは、普遍的ではないということが明らかになる。日本文学の初期の文献の保存のケースを横においてみれば、急にラテン文学のケースはおかしく見えてくる(そして、逆に、ラテン文学のケースを日本文学の保存パターンに照らしみると、日本文学のケースは不自然に見え、説明が要求される)。筆者のブックプロジェクトでは、日本文学とラテン文学の前期の文献の保存パターンの大きな違いは、ローマの文人がギリシアの言語および文学とラテン語を比較することで脅迫感を抱くという、確かな言語劣等感と関係があったのではないかということとを詳細に論じている。キケロとホラティウスのようなローマの黄金時代の文人による、例えばリウィウス・アンドロニクスは「原始的だから再読しないほうがよい」とか、ルーシ

リウスの作品は洗練されていないから恥ずかしいなどという評価判断は、確かに前期のラテン文学に死刑を宣告したに等しい。それとは対照的に、周知のように村上天皇期の歌人・学者たちによって、『万葉集』の歌は上代における立派で尊敬すべき文学遺産と評価され、この名声の下、『万葉集』はその後の長く豊かな受容史を経るばかりか、二〇世紀になると日本の本質を表すエスプリとまで言われる、日本文学史上第一級の賜物と賞賛されるに至るのである。

第四相違点——ジャンル体系

(詩歌に対する叙事詩と演劇)

古代日本文学とラテン文学の第四の相違点は、両文学伝統の構造ともいうべきジャンルとその体系の大きな異なりである。ローマ文学はギリシア文学のジャンル体系を踏襲し、叙事詩(epos)と演劇(特に悲劇)を最も高い地位に揚げた。だからこそ、リウィウス・アンドロニクスはギリシアにおけるジャンル体系の中から最高峰の叙事詩と演劇のジャンルを選び、ラテン語へ翻訳したわけだ。そして日本文学とは対照的に、漢詩や和歌のような短い詩歌の文体はラテン文学においてはアウグストゥスの時代以前は余り重んじられなかった。

言うまでもなく、古代日本文学は中国文学に倣って、漢詩文のジャンル、特に漢詩を(そして勅撰集の伝統が成立してから)は、和文体の中から和歌をジャンル体系のヒエラルキーのトップに位置付けた。ところが、叙事詩のジャンルは、東アジア

には存在しなかったし、演劇の様々なジャンルも、一四世紀以前の日本文学の最初の七〇〇年の間には文学ジャンルとして存在しなかった。残念ながら前期のラテン文学の産物として唯一現存しているジャンルはブラウトゥスとテレンティウスの喜劇であるという事実は、この前期の日本文学とラテン文学の間のギャップを広げざるを得ない。さらに、古代日本とローマの比較を難しくすることは、ローマ社会における全ての政治制度・法律制度・教育制度と文学に浸透した「弁論術」(rhetoric)という学科が日本には存在しなかったことである。しかし、そのジャンル体系の間の大きなギャップは、ローマと日本文学の比較を複雑にしようという一方で、その面白さを高めるともいえるのである。

II b 比較の事例——後発文学伝統における「文」

(文飾, ornament)と「質」(substance/simplicity)

筆者は現在、ここまで述べてきた中国および日本の文学伝統と、ギリシアおよびラテンの文学伝統の間の共通点と相違点の枠組みを使って「古典世界の比較文学——中一」と希羅の関係をひも解く」という幅広いブックプロジェクトを進めている最中である。プロジェクトは三つの部分からなり、第一部は「後発文学伝統の展開」というテーマのもと、日本とラテン文学において「文学」という文化的な現象がいつどのように創出されたかという問題について資料を比較しながら論じ、新釈を展開している。本エッセイでは、続く部

分において後発文学伝統における「文」(ornamentation/ornateness)と「質」(substance/simplicity)の概念の発展史と役割を考察する。プロジェクトの第二部は「後発文学伝統における国家と文学」というテーマを扱い、『聖徳太子伝略』とウェルギリウス(Vergilius)の『アエネアースの物語』(Aeneis)において建国の象徴的人物として描かれる聖徳太子とアエネアースを対照し、両者を再解釈している。さらに「都の文学的な空間—平安京とローマ」「都と流刑—菅原道真とオウィディウス(Ovidius)(紀元前四三年—紀元一八年)」と題した章が存在する。最後に、プロジェクトの第三部は「若い文学伝統と先行文学伝統の間の競争方法・並列図式」というテーマについて論じているが、本稿では、エピソードで中・日文学伝統と希・羅文学伝統の比較の方法、目的、そして将来の「世界古典比較文学」の可能性と方法を総合的に要約することにする。直前に述べたとおり、これから本稿の読者にこの研究枠組みを具体的な論説に適用する事例を紹介するべく、ブックプロジェクトの第一部第三章にあたる、後発文学としての古代日本とローマ文学における「文」と「質」という概念の発展史について論じたいと思う。周知のように「文」と「質」の概念ペアは、少なくとも『論語』の「文質彬彬、然后君子」まで遡るが、東アジアにおいて歴史的意義の非常に深い概念である。たくさんある意味の中から、ここでは特に「文飾」の意味、および、文章における文彩的で洗練された作風の側面を取り上げたい。具体的には「雅」があり、豊かな語彙、

複雑な文法、そしてレトリックの言語的な「化粧」をつけることを指している。同じように、「文」と似ているギリシア・ローマの弁論術における「ornatus」という概念は、スピーチおよび文章に豊かな内容を与えるための技法(figure)、つまり比喩、倒置法等の文飾を付けることを意味する。いうまでもなく「文」とラテン語の「ornatus」は自然に習得するものではなく、長期の教育を受けながら身につけるべきものである。つまり、教育とトレーニングを通してのみ「文」と「ornatus」を完全に操ることができるようになる。ブックプロジェクトのその一章では次の三点について論じている。一つは、日本とローマの文人は、「文」と「ornatus」にあふれた先行する六朝と初唐の文学とヘレニズム期の文学から出発してきた後発文学であったために、この「文」と「質」の概念について類似したアンビバレントな立場を取ったという点である。一方では「文」を有するのは文明および文学のレベルが高いことの象徴であったので、魅力的で、望ましいことであったが、もう一方では「文」はそれぞれ六朝文学、およびヘレニズム期の文学の特徴であったため、ある意味で外来文化のイメージを呼び起こす可能性があった。それにもかかわらず、第二の論点として、日本とローマ文学が、草創期の約二〇〇年の間、「文・ornatus」の概念を重んじ、唱え、「質」より優位に考えたことは興味深い現象である。「質」の概念の価値は「文」よりも遅く発見された。ローマの場合はローマの共和制末期、つまりキケロの時代ぐ

らいに文学史上の大変な転換期であった時期に起こった。古今集時代の変革時期と似ているといえるであろう。共和制末期、キケロのいたローマで、そして平安時代、『古今集』が作られた日本で、なぜ「質」の価値が急に重んじられるようになったかという点、自分自身の文学伝統から、先行するギリシアと中国(および日本漢文の伝統の「文」に対して独自性を立てようとしたからではないかと考える。

第三の論点は、にわかに「質」の概念を唱えようとしたために、キケロや『古今集』の真名序がともに、ローマ/日本の本来の「質」がギリシア/中国の影響を受けてしまったために墮落した、と主張した点である。この「墮落の語り」(decline narrative)こそが、「質」(日本の場合和歌という尊重すべき伝統)を復活させることの必要性を正当化し、推し進めることを可能にした。

古今集以前の「文」

佐藤卓己

現代史のリテラシー

—書物の宇宙—

四六判・264頁 定価2415円(税込)

ナチス問題から近代日本の戦争と知識人の問題、現代文化論、教育論からメディア論まで——歴史学と社会学が出会う場所、現代の輪郭が書物の宇宙の彼方に浮かび上がる。歴史と同時代を理解するための視座を提供する書評集。

岩波書店

以上、極端に省略した観のある三つの論点に少し原文の証明をつけていくことにしよう。奈良時代のいくつかの文章を見渡すと、「文」という魅力的な概念は、基本的な価値とみなされていたということがよくわかる。この点について、ブックプロジェクトは一章を割き、まず『懐風藻』の序、そして『万葉集』の中の大伴家持と大伴池主の間の注目すべき詩歌のやり取り、最後に藤原浜成の『歌経標式』を取り上げ、「文」の概念に対する尊敬の念の例として、詳しく分析している。本エッセイではその一章の内容を詳述することはできないが、その代わりに論法だけを紹介する。

まず『懐風藻』の序の例を挙げる。簡単に言えば、この序は「文」という概念を軸にして、天孫降臨から天智天皇にかけての日本での「文」の展開の歴史について述べている(「人文」、つまり文明の始まり、「文」字の伝来、そして天智天皇の朝廷における文人による漢詩宴会の際の「文」学の発生、さらには天智天皇が古代中国の周朝の「文王」と同じように行った道德的な政治、すな

わち段階的な文明の展開について説明している。『懷風藻』の序は、「文」の概念を日本文明の発展における最も中心的な概念とみなし、はっきりと褒めたたえているといえる(16)。

八世紀に「文」の概念にどのような価値がつけられたかということの二番目の例として、七四七年に越中の国司に任ぜられた家持と持主の詩歌のやり取りが挙げられる。しかし残念ながらこの立派な、『万葉集』の中でも最も多面的かつ輝かしい何篇かの詩歌についての詳細な分析をここでは行えない。一段だけ例として示し、家持と持主の創意に富んだ、「文」と「質」の概念が展開する文学の遊びを紹介する。

含弘之徳、垂思蓬体、不質之恩、報慰陋心。載荷来脊、無堪所喻也。但以稚時不涉遊藝之庭、横翰之藻、自乏乎彫蟲焉。幼年未遯山柿之門、裁歌之趣、詞失乎蔡林矣。爰辱以藤統錦之言、更題將石間瓊之詠。固是俗愚懷癖、不能默已。仍捧数行、式酬嗤咲。

訓 含弘の徳は、思を蓬体に垂れ、不質の恩は、慰を陋心に報ふ。来脊を載荷し、喻ふる所に堪ふるものなし。ただし、稚き時に遊藝の庭に涉らざりしを以て、横翰の藻、自らに彫蟲に乏し。幼年に未だ山柿(17)の門に遯らず、裁歌の趣、詞を蔡林に失ふ。ここに藤を以て錦に続くの言を辱みし、更に石を將ちて瓊に間ふる詠を題す。固よりはれ俗愚にして癖を懷き、黙已ること能はず。仍りて数行を捧げ、式で嗤笑に酬いむ。(18)

謙遜を装う家持は自分の詩作の能力(横翰の藻、自らに彫蟲

に乏し)と歌詠の能力(裁歌之趣、詞失乎蔡林矣)を嗤笑しながらも、文彩にあふれた作風を操る。家持は詩歌の執筆について漢代の楊雄という賦の作者の「蟲を彫る」(19)という軽蔑的な表現を使って捉えている。この段は、文字通りに読めば「文」の洗練を否定し軽視しているのだが、その書き手の家持が実は高度に気品に満ちた文体と学問をひけらかしているのは明らかだ。すなわち彼は、素朴さと「質」に関するこの傾倒を、実に逆説的な言葉遊びで披瀝してみせているのである。

「文」の価値は漢文においてだけではなく、八世紀に和歌においても提唱されたことは注目すべきことである。奈良時代の「文」の概念を重んじる態度を示す最後の例としては、日本における最初の和歌論書である『歌経標式』を取り上げたい。『古今集』では自然に歌を作り出すという人間の本能を説いているのに対して、『歌経標式』ではそれとは全く違い、「文」と歌の巧妙な文学性を重視する立場を唱えている。

原夫歌者所以感鬼神之幽情、慰天人之恋心者也。韻者所以異於風俗之言語、長於遊樂之精神者也。故有龍女帰海天孫贈於恋婦歌、味相昇天会者作称威之詠。並尺雅妙之音韻之始也(中略)近代歌人、雖長歌句、未知音韻。令他悦懌、猶無知病。准之上古、既無春花之儀、伝之来葉、不見秋実之味。無六体何能慰天人之際之乎。

訓 原れば夫れ、歌は鬼神の幽情を感かし、天人の恋心を慰むる所以なり。韻は風俗の言語に異ひ、遊樂の精神

古今集時代の「文」に対する「道」

八世紀におけるこの「文」への尊敬とは打って変わって、古今集時代に入ると、「文」の概念は大きな挑戦を受けることになる。特に『古今集』の真名序は、中国から伝来した文字と日本に輸入された文体と、さらに漢詩と賦の文体を取り上げたことで、和歌が墮落してしまったということを次のように主張している。

自大津皇子之。初作詩賦。詞人才子。慕風繼塵。移彼漢家之字。化我日域之俗。民業一改。和歌漸衰。然猶有先師柿本大夫者。高振神妙之思。獨步古今之間。有山部赤人者。並和歌仙也。

訓 大津皇子の、初めて詩賦を作りしより、詞人才子、風を慕ひ塵を繼ぐ。彼の漢家の字を移し、我が日域の俗を化ふ。民業一たび改りて、和歌漸く衰ふ。然れども猶し先師柿本大夫といふ者有り。高く神妙の思ひを振ひ、独り古今の間に歩む。山部赤人といふ者有り。並びに和

を長す所以なり。故、龍女海に帰り、天孫婦に恋ふる歌を贈ること、味相天に昇り、会へる者威を称むる詠を作すこと有り。並びに雅妙の音韻を尽くす始めなり(中略)近代の歌人、歌句に長くと雖も、音韻を知らず。他をして悦懌せしむるも、猶し病を知ること無し。これを上古に准ふるに、既に春の花の儀無く、これを来葉に伝ふるに、秋の実の味を見ず。六体無くは何ぞ能く天人の際を感慰せしめむや。(20)

『歌経標式』においては和歌というものは、押韻を使うもの、普通の口語とは違う「雅妙」の言語であり、漢詩の基準に従って「歌病」と「六義(六体)」を適用しなければならない、文飾にあふれた文体と素描される。つまり、『歌経標式』が評する和歌というものは、『古今集』以来定説となった人間の自然な本能の産物であるという大和の歌の概念とは全く異なっている。

盛本昌広

草と木が語る日本の中世

四六判・312頁 定価3360円(税込)

草や木をめぐる中世の人々の認識、その利用の諸相や流通の実態、資源管理のあり方を、文献や絵巻物、考古学の成果や植物学の知見によって解明。人間にとって最も身近な自然である草や木を通じて中世の歴史像に新たな光を当てる。

岩波書店

歌の仙なり。②

これは典型的な「墮落の語り」(narrative of decline)であると言え。面白いのは、和歌を衰えさせた元凶は中国の文字と文体であるとしながら、その元凶を持ち込んだ悪漢は、漢人ではなく、天武天皇の息子の天津皇子、つまり大和の貴族であるとしている点である。

和歌が漢字と漢詩文の影響を受けて墮落してしまったとする語りを展開した上で、真名序は、その日本漢詩文の歴史において『懐風藻』以降特に嵯峨天皇の時代の勅撰漢詩集でも大いに敬意を払われた「文」の概念をおとしめる。そして「文」の概念に取って代わって、新しい「道」の概念を前面に押し出そうとした。このことは真名序の最後の段落をみれば明らかである。

適遇和歌之中興、以樂吾道之再昌。嗚呼 人丸既没、和謂不在斯哉。

訓 たまたま和歌の中興に遇ひ、以ちて吾が道の再び昌なることを楽しむ。嗚呼 人麻呂既に没す、和歌ここにあらざらむや。(22)

これは『論語』の孔子が匡という場所で困っていた時「文王既没、文不在茲乎」(文王は既に亡くなられたけれども、その文化はここつまり、わが身に伝わっているぞ)という故事の大胆な書き直しである(23)。どのように置き換えられているかという、周朝を建立させた道徳の人、文王は「歌道」の守り神である人麻呂に置き換えられ、「周の文化」は「歌の道」に置

き換えられている。そして、この伝統の伝達者である孔子と『論語』は、醍醐朝の『古今和歌集』編纂者たちと、『古今和歌集』そのものに置き換えられているというわけだ。この箇所は、八・九世紀に盛んであった漢詩文の伝統である「文」の概念に対して、新しく作り出した歌の「道」という概念をもって挑戦するという素晴らしい論法であったといえるだろう。それは、『古今集』の歌の「道」というものは、「文」とは対照的に、自然で普遍性があり、「文」のような教養が要求されることのない、人間の本能に属するもの、なおかつ自然の「質」を持ち合わせたものであることから、漢詩文の「文」の概念とは甚だ異なるものだった。

共和制末期のローマの「文」と「質」の概念

興味深いのは、共和制末期の偉大な政治家兼文人であったキケロが、『古今集』の真名序にある、和歌における自然な「道」を漢詩文における人工的な「文」と対照させたのと似た論法を、ローマの自然な弁論術の独自性を唱えるために使っていることである。

ローマの弁論術の歴史について書かれた『ブルータス』(Brutus)という対話篇の書物に、人麻呂と類似した、古いローマ弁論術の「道」を掲げる人物が登場する。キケロによると、この人物は、ギリシアから伝わった弁論術の文彩や技術を習得していないにもかかわらず、自由に弁論術を操る本能を持ち、ローマのギリシアからの独立性を象徴する人物であ

る。だからこそキケロはこの人物に対して最高の敬意と賞賛を与える。その人物とは、あの大カトーである。大カトーは、古代ローマの価値観を外来文化の影響から守らなければならぬと頻りに警告したとされ、非常に厳しい政治家兼監察官(ケンソル censor)としても、有名である。大カトーがどれほどギリシア文化の影響を腹藏なく責めたかという、真名序における外来文化の影響を批判する典型的な「墮落の語り」(narrative of decline)に相当する、以下の大カトーの言葉を見れば明らかである。

息子マルクスよ、あのギリシアの奴らについては適當なところで語るであらう。そしてアテナイのわたしの調査の結果を示し、彼らの文献について綿密な研究もしないで、それに頭を突込んでどんな利益を得られるのかについてお前に納得させよう。奴らは、全然無価値な国民で、手に負えない国民なのだ。そしてお前は、わたしのことをばを予言だと考えなければならぬ。あの民族がその文

献をわれわれのところへ送ってくるとき、それは何もかも腐敗させてしまう。そしてその医者を送ってくるときはいよいよもってそうだ。彼らは彼らの医術で、すべての外国人を殺戮しようと共謀する。しかも信用させておいて、われわれを容易に破滅させるために。そういうことをやるにも報酬を取るのだ。奴らはまた、いつもわれわれを外国人と呼ぶ。そして他の外国人によりもいっそうひどい泥をわれわれに投げつけ、われわれにオビキ(24)という汚い綽名を与えている。わたしはお前が医者どもとかかわりあいを持つことを禁ずる。(25)

真名序では中国の影響は日本の和歌を衰退させるとしたのみだが、大カトーはギリシアの影響がローマ人の文化・文学を腐敗させるのみならず、ローマ人を殺してさえしまうことを予言している。

キケロは『ブルータス』の中で、ギリシア人が大嫌いなこの大カトーを古いローマ弁論術の象徴的人物として描写して

高橋睦郎

詩心二千年

—スサノヲから3・11へ—

四六判・376頁 定価3570円(税込)

古代、恋と鎮めを担った和歌の詩心は、連歌、俳諧はもとより、平家物語、源氏物語、猿楽能、浄瑠璃、歌舞伎へと拡がり、近現代詩へとやかに継承されたか。詩の営みと、そこに隠された人間ドラマの歴史を活き活きと描き出す。

岩波書店

いる。

近頃われわれ演説者(オラトル)の一体誰がカトーについて読むか、あるいはよく知っているというのか。そうでないとは、大した人たちだ、なんという人たちだ！わたしは彼を市民、元老院議員および指揮官だと思って、彼が演説者であることを見落としていた。「彼のスピーチ」から抜粋した賞賛に値するすばらしい文章を見れば、演説の長所のすべてがそこにあることがわかる。それらは、ギリシア人が、「比喩」(tropos; 英: "tropes")と呼ぶ「一」の言葉の代用や「スキーマ」(oxymoron; 英: "figures")と名づけた修辭的表現法であり、それらを使うことをギリシア人はスピーチの装飾だと考えている。カトーはこの二つの修辭法を信じられないぐらい多彩にそして巧みに使いこなした。もちろん、私は、彼がまだ演説者として十分に洗練されてはおらず、より完璧になるための何かが足りないことも分かっている。が、それは別に不思議なことではない。なぜならば、われわれの時代の道理からすれば、彼より古いテキストで読む価値のあるものはいくらか、彼が古風だからだ。(26)

ここでキケロは、激しくギリシア文化の影響に反発した大カトーがギリシアの弁論術の文彩(すなわち"tropes"と"figures"の)にあたる言語芸術を知ることなく、本能のままに、優れたローマの弁論術の独自性を示した弁論家であると主張している。

これを見ると、国風を強化する運動が起こった点では、古今集時代がキケロの共和制末期の時代に匹敵すると考えてよいと思うが、しかし、その国風運動の結果が日本とローマとは全く違った。ご存知のように、小島憲之氏が「国風暗黒時代」と称した九世紀は、日本の歴史における例外時期であり、古今集時代の国風化がある意味で成功して、勅撰漢詩集よりも勅撰和歌集が主流となった。それとは対照的に、共和制末期におけるキケロの古いローマの文人の作風を賞賛する試みは大きく失敗した。キケロ自身もところどころでそう話しているが、アウグストゥス時代に入ると例えばホラティウスという詩人が共和制末期以前のローマの「古い」文学を軽蔑し、むしろ古典期のギリシアをモデルとして身につけ、ローマ帝国の新しい文学風景を創り出すのである。

III 終わりに——「世界古典比較文学論」の展望

以上、中・日文学と希・羅文学の対比を通して、筆者が提案する「世界古典比較文学論」の方法と価値が読者諸氏に伝わっていれば、幸いである。具体的な細かい例を挙げることで、ある一定の収穫をもたらしたことを期待する。ここまでは後発文学伝統における「文」文飾(ornament)と「質」(substance/simplicity)の概念を対比させてきたわけだが、立論を総合して纏めると、次のようになる。ある先行する文学伝統の先例に対して展開される後発文学伝統は、初めにより古い先例文化の洗練された魅力に気づき、その洗練さをもてはや

し、自分自身が作り出していく文学伝統に取り入れる。その後、洗練された「文」を主にした何百年間かの時期を経て、今度は国風強化の運動が台頭した際に、後発文学伝統の文人は単純を核とする「質」の価値を突然発見するようになる。

もし、そのときの国風文学を正当化する論説が受け入れられたのであれば、後世の人々は遅れて見出された単純で神話のような幻想を真実として見ることになる。日本の場合で言えば、「やはり、日本人は洗練された中国文化と違って、自然や単純さに敬意を払う特徴を持つ民族なのだ」という意見は、おそらく日本の歴史において最も興味深い幻想(あるいは、柔らかく言えば、神話)なのではないか。ローマの場合、キケロが掲げた国風を正当化する極端な大カトー主義は否定されてしまった(キケロ自身も最初から、極端すぎる意見であるかもしれないと分かっていた)。この失敗により、キケロ以降のローマ文学は、よりギリシアの先例を重視するようになり、日本のような国風の独自性や自由さを持つことはなかったといえる。

結論として、後発の文学伝統における「質」の概念は、自然な概念というよりも、自分自身の文学の独自性を打ち立てるための論策として理解しなければならぬと指摘できる。

また、日本とラテン文学の対比により、あるテーマ(例えば後発文学の展開の過程)についての理論を作り出すことができるだけではなく、日本文学の独自性と特徴をより明確に認識できたことも意義深い。ローマで前期のラテン文学のほとんどすべてがなくなってしまったのとは対照的に、日本ではローマにあったような自国語に対する「言語コンプレックス」が存在しなかったため、大半の上代文学の作品が見事に、ラテン文学者からしたら羨ましくなってしまうほどの状態で今日まで伝えられてきた。それはラテンと日本の古代文学の間の大きな差異であり、日本の研究者がより意識的にその真価を認め、再考するべき現象である。

最後に、「世界古典比較文学論」は将来どのようにに発展させればよいだろうか。最も根本的なレベルでは基礎教育から

横道萬里雄

日本の楽劇

A5判・552頁 定価15,750円(税込)

楽劇とは、舞踊的要素と音楽的要素が不可分に結合して演劇性を生み出す舞台芸術である。能楽、文楽、歌舞伎、琉球芸能、寺事といった日本の主要な伝統芸能を、楽劇という観点から総合的に分析し、その構造と特質を叙述する。

岩波書店

始まるだろう。アメリカでの新しい「世界文学」の授業においては、大学生は『詩経』を『万葉集』とともに読むことになり、『論語』をプラトンの対話篇とともに読むことになり、インドの古い叙事詩をギリシアのホメーロスの叙事詩とともに読むことになる。この新しい教育方法を通して、ゲーテの言葉を借りて言えば、「二一世紀も初めのうちに」「世界文学の時代」は到来するのではないか。世界の時代時代の大作を別々の作品として読むのではなく、各国の文学伝統を対照的に、すなわちお互いを照らし合わせながら捉えていく。それは学生たちが将来、真のコスモポリタン、世界国民、世界文学者になるための方法であると信じる。

留意したいのは「世界文学」のパラダイムを日本の学問世界と教育制度に持ち込んだとしても、日本に非常に強く存在する「国文学」のパラダイムを傷つける危険性は全くないということである。いやむしろ、その新奇な「世界文学」のパラダイムは却って逆に、本来の「国文学」の価値と枠組みに関する意識を増大させる可能性がある」と、筆者は思っている。

- (1) 31. Januar 1827. „Nationalliteratur will jetzt nicht viel sagen, die Epoche der Weltliteratur ist an der Zeit, und jeder muss jetzt dazu wirken, diese Epoche zu beschleunigen.“ „Eckermann Gespräche mit Goethe.“ Johann Wolfgang Goethe. *Samtliche Werke* (Frankfurt: Deutscher Klassiker Verlag, 1999), Vol. 12 (39), 225.
- (2) Wolfgang Schamoni. „Weltliteratur“ - zuerst 1773 bei August Ludwig Schlozer. *Arcadia. Internationale Zeitschrift für Literatur*.

文学とは何ぞ』日本語版(二〇一一年)

- (10) “World literature is not an object, it's a problem, and a problem that asks for a new critical method; and no-one has ever found a method by just reading more texts. That's not how theories come into being: they need a leap, a wager—a hypothesis—to get started.”

Moretti, “Conjectures about World Literature.” Christopher Prendergast (編). *Debating World Literature* (London, New York: Verso, 2004), 148.

- (11) 日本の和歌とギリシア・ローマ詩歌の比較への異なったアプローチ。フーローチは最近『文学』誌上に掲載の、韻律の問題と場の文脈に焦点を当てた次の二つの座談会を参照された。『和歌とギリシアローマの詩』『文学』(第一一巻第四号)二〇一〇年、一一六—一二二頁と(第一二巻第六号)二〇一〇年、一六〇—一九四頁。

- (12) *Instituto Oratoria*, 101.93-95. Donald A. Russell (校訳). *Quintilian. The Orator's Education* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001) (羅・英対照版)。

- (13) 小島憲之校注『懐風藻』文華秀麗集・本朝文粹』日本古典文学大系 69 (岩波書店、一九六四年、六〇頁)。

wissenschaft 43.2 (2008): 288-298. ユーリッヒ・シュタム

「二一世紀の初めに初出していた語」『文学』第二二巻第三号(二〇一〇年、一七三—一八八頁)

- (3) „Die nationale Einseitigkeit und Beschränktheit wird mehr und mehr unmöglich, und aus den vielen nationalen und lokalen Literaturen bildet sich eine Weltliteratur.“ Karl Marx und Friedrich Engels. *Manifest der Kommunistischen Partei* (Stuttgart: Philipp Reclam Jr., 1969), 28. 金塚貞文訳『共産主義者宣言』(大田出版、一九九三年、一七頁)

- (4) ゲーテの概念の前期の受容史について David Damrosch. *What is World Literature?* (Princeton: Princeton University Press, 2003), 1-36. を参照。本書の序の概念のノートは今日でも多くの議論を巻き起こしている John Pizer. *The Idea of World Literature. History and Pedagogical Practice* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2006), 18-82. を参照。

- (5) Heinz Ludwig Arnold (主編). *Kindlers Literatur Lexikon*. 第11新版 9冊 (Berlin: J. B. Metzler, 2009).

- (6) John Pizer. *The Idea of World Literature*, 85.

- (7) ヘンリッヒ・シュタム『世界文学受容史』について John Pizer. *The Idea of World Literature* の第五章を参照。

- (8) ユーリッヒ・シュタム『出版の統計』について。

- (9) “World literature is fully in play once several foreign works begin to resonate together in our mind. This provides a further solution to the comparatist's lurking panic: world literature is not an immense body of material that must somehow, impossibly, be mastered; it is a mode of reading that can be experienced intensively with a few works just as effectively as it can be explored extensively with a large number.” Damrosch. *What is World Literature* (Princeton: Princeton University Press, 2003), 298-99. (11頁)

- (14) 上の概念について Thorsten Fiegen. *Partii sermonis egestas. Einstellungen lateinischer Autoren zu ihrer Muttersprache. Ein Beitrag zum Sprachbewusstsein in der römischen Antike* (München, Leipzig: K. G. Saur, 2000) を参照。

- (15) *Comedias lectissimas nostrorum poetarum sumptis ac versas de Graecis... comicis. Neque, cum legimus eos, nimium sane discent, quin lepide quoque et venuste scribata videantur, prorsus ut melius posse fieri nihil censas. Sed enim si confers et componas Graeca ipsa, unde illa venerunt, ac singulari considerate atque apte iunctis et alternis lectionibus committis, oppido quam tacere atque sordere incipiunt, quae Latina sunt; ita Graecarum, quae aemulari nequiverunt, facietis atque luminibus obsolescunt.* Aulus Gellius. *Noctes Atticae* II, 23.1-3. 羅・英対照版 G. John C. Rolfe. *The Attic Nights of Aulus Gellius*. Vol. I (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1967-1984) を参照。

- (16) 「文」概念に関わる『懐風藻』序の重要な原文は以下を参照。

1. 国家の成立——

「襲山降蹕之世、檀原建邦之時、天造草創、人文未作。」

訓：襲山降蹕の世に、檀原建邦の時に、天造草創にして、人文未だ作

ディアスポラを生きる詩人

金時鐘

細見和之

四六判・264頁 定価2835円(税込)

多くの表現者、知識人に深甚なる影響を与えてきた在日の詩人。その生を刻みつけるようにしてつむがれてきた詩作／思索を、個人史と在日史、戦中・戦後史に重ね合わせて描く。脱植民地化を追い求めた詩人の全休像。

岩波書店

らず

2. 文字・文獻・儒教の伝来――

「百濟入朝、王仁始導蒙於輕島、辰爾終敷教於譯田。遂使俗漸洗泗之風、人趨齊魯之學」

訓：百濟入朝して、王仁初めて蒙を輕島に導き、辰爾終に教を譯田に敷く。遂に俗を洗泗の風に漸め、人を齊魯の學に趨かしむ。

3. 天智天皇の御世：

「既而以為、調風化俗、莫尚於文。爰則建庠序、徵茂才、旋招文學之士、時開置醴之遊」

訓：既にして以為はしけらく、風を調へ俗を化むることは、文より尚きことは莫く。ここにすなわち庠序を建て、茂才を徵し、文學の士を招き、時に置醴の遊びを開きたまふ。(以上訓読・小島憲之)

(17) 二説がある：柿本人麻呂と山部赤人、それとも柿本人麻呂と山上憶良。この議論については神野志隆光・坂本信幸編『セミナー万葉の歌人と作品』和泉書院、一九九二〇〇五年、第八卷、一六四―一七五頁を参照。

(18) 『万葉集』卷十七・三九六九。小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集』小学館、一九九四年――

(19) 楊雄の『法言』：「或問：吾子少而好賦。曰：然。童子雕蟲篆刻。俄而曰：壯夫不為也。或曰：賦可以諷乎？曰：諷乎！諷則已、不

已、吾恐不免於勸也。」汪榮寶(撰)・陳仲夫(點校)『法言義疏』北京中華書局、新華書店北京發行所發行、一九八七、四五頁

(20) 沖森卓也『歌經標式：注釈と研究』校楓社、一九九三年、一一三―一四頁

(21) 小島憲之・新井榮蔵校注『古今和歌集』(新日本古典文学大系5、岩波書店、一九八九年、三四二―三四三頁)

(22) 小島憲之・新井榮蔵校注『古今和歌集』三四八―三五二頁

(23) 『論語』「子罕第九」：「子畏於匡、曰文王既沒、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予」

執筆者略記

秋草俊一郎(あきくち しゅんいちろう)
一九七九年――

比較文学、世界文学／『ナボコフ訳すのは「私」――自己翻訳がひらくテキスト』

ジェフリー・アングルス(Jeffrey Angus)／

ウェスタン・ミシガン大学准教授／現代日本文学、翻訳研究／Writing the Love of Boys: Origins of Bisexual Culture in Japanese Modernist Literature

井上健(いのうえ けん)一九八五年――

日本大学教授、東京大学名誉教授／比較文学、アメリカ文学／『文豪の翻訳力――近現代の作家翻訳 谷崎潤一郎から村上春樹まで』

加藤百合(かとう ゆり)一九八四年――

筑波大学准教授／明治期比較文学、ロシア文学／『明治期露西亜文学翻訳論攷』(近刊)

何ぞ」

(24) つまりイタリアの野蛮な部族。

(25) Plinius. *Naturalis historia* 29.14. H. Rackham. *Pliny. Naturalis historia* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1949-62). 中野定雄他訳『プリーニウスの博物誌』雄山閣出版、一九八六年、第三巻、一二二五頁

(26) Cicero. *Brutus* 17.65-18.69. G. L. Hendrickson. *Cicero, Brutus* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1962), 65.

付記：このエッセイのオリジナルテキストは関西大学東西学術研究所の特別講演用に用意されたものである。この講演会にお呼びいただき、意義深い質疑や意見を頂戴した素晴らしい聴衆のみなさんにお会いできる機会を与えてくださった山本登朗教授にこの場を借りて再度お礼を申し上げたい。さらに、その内容を書き起こして『文学』に寄せてみてはと助言いただいた堀川貴司教授と、この書き起こしエッセイの執筆にあたって多大な支援と卓見とを頂戴した佐藤道生教授にも心からのお礼を申し上げる。日本語テキストの推敲および編集には岩崎夕子氏と北丸雄二氏に細部にわたって労を執っていただいた。この御二方にも謝意を表したい。

三枝大修(さいぐさ ひろお)一九七九年――

東京大学大学院総合文化研究科助教／フランス近代詩／「ロートレアモン伯爵、劇場へ」

鈴木貞美(さだみ)一九七七年――

国際日本文化研究センター教授、総合研究大学院大学文化科学研究科教授／古典評価を含む近現代日本文学文化／『生命観の探究――重層する危機のなかで』

ウィーブケ・デーネケ(Wiebe Denecke、魏模和)／

ボストン大学准教授／古代・中世における中国と日本の文学・思想／「句題詩の展開――漢詩」から「和詩」へ

中島京子(なかじま きょうこ)一九八四年――

小説家／『小さいうち』

沼野充義(ぬまの みつよし)一九八四年――

東京大学教授／ロシア・ポーランド文学／『徹夜の塊 ユートピア文学論』

堀啓子(ほり けいこ)一九七五年――

東海大学准教授／近代文学／『和装

のヴィクトリア文学』

マティルデ・マストランジエロ(Matilde Mastrangelo)／

サビエンツァ・ローマ大学准教授、同大学東洋研究学科長／日本近代文学／Mori Ōgai. *Il romanticismo e l'eterno*

松永美穂(まつなが みほ)一九八六年――

早稲田大学教授／現代ドイツ文学、翻訳論／『誤解で「読む」います』

明星聖子(みょうじょう きよこ)――

埼玉大学教授／ドイツ文学／『新しいカフカ――編集』が変えるテキスト

湯浅博雄(ゆあさ ひろお)一九八七年――

東京大学名誉教授／言語学理論、フランス思想・文学／『翻訳のポイエーシス』

次号は、十六世紀の文学についての特集です。どうぞご期待ください。